

第24回近現代史研究会報告

ノモンハン事件の作戦経過

原 剛 陸自60

はじめに

ノモンハン事件の作戦について述べる前に、ノモンハン事件の特性および戦場地域の特性について述べる。

一 ノモンハン事件の特性

①ノモンハン事件は、1939年(昭和14)5〜9月にわたり、満洲西北部の満洲国と外蒙古(モンゴル)との国境地帯ノモンハン付近で、ソ連・外蒙軍と日本・満洲国軍の間での国境小紛争が、日本軍の誤判断から予想もしない戦略的大会戦にまで拡大した事件である。

②日本軍が、強大なソ連軍の火力・機動力による近代戦の洗礼を受け敗北した戦いである。

近年ソ連側の史料が公開され、ソ連・外蒙軍の損害が、日本・満洲軍の損害を上回っていることが判明し、一部の人はこれをもって日本軍は負けていないと主張している。しかし勝敗は損害の多寡で論じられるものではない。日露戦争の旅順の攻略戦で、日本軍はロシア軍の数倍の損害を被ったが、誰もロシアが勝ち日本軍が負けた

とは言わない。また、硫黄島で米軍は日本軍を上回る損害を出したが、米軍が負け日本軍が勝ったなどとは言われない。ノモンハンで、局部的には善戦・敢闘しソ連軍を撃退したところもあったが、作戦全般として、また戦略的には、日本軍は敗北したのである。

二 戦場地域の特性

①大波状地の草原地帯

戦場となった地域は、見渡す限りの大波状地の草原地帯で、特質ある地形地物が少なく、作戦部隊としては地点の評定が極めて困難で、しばしば目標地点を誤ることがあった。広々としたなだらかな草原で、例えばフイ高地と岡上で示されても、実際の現地では何処がフイ高地なのか、なかなか見分けられないような地形であった。

②ハルハ河兩岸の比高差が大

ハルハ河左岸(外蒙側)の一連の台地は、右岸(満洲国側)一帯より最大約50メートル高く、日本軍陣地地帯は左岸台地上から完全に俯瞰されていた。一方日本軍側からは、左岸台の上のソ連

軍陣地は全く見えず、ただ台端が見えるだけであった。従って、ソ連軍は日本軍の陣地の状況、動きなどがよく見ることができたが、日本軍はソ連軍の状況はほとんど見えなかった。

③土質はほとんどが砂質

陣地地域は砂質で、工事の掘削は容易であったが、崩れやすく、陣地の強度は不十分であった。日本軍の陣地は、ソ連軍の砲兵火力と戦車により容易に潰された。

このような地形での戦闘は、強大な火力と機動力を有するソ連軍には極めて有利であったが、歩兵中心的な日本軍には逆に極めて不利であった。

三 関東軍の「満ソ国境処理要綱」

関東軍は度重なる国境紛争を処理するため、「国境紛争処理要綱」を策定し、1949年4月25日、隷下兵団長などを新京に召集し、作戦命令(関作命第1488号)により示達した。この要綱は、司令部作戦課辻政信参謀が起草したもので、不明確な箇所が多い長大な国境線を整備する関東軍として、「侵さず侵されず」を基調とした、国境守備に対する強い決意を示すものであった。関東軍はこの要綱を隷下に達するとともに、参謀本部に報告したが、参謀本部はその内容を充分検討し指導すべきところは指導すべきであっ

たが、何らの意思表示もなかった。関東軍は当然容認されたものと理解し、以後これに基づき作戦を指導していった。しかし、この内容とそこに秘められた関東軍の積極的意志ならびに参謀本部の指導統制の不十分が、後に大会戦を招くことになった。以下この問題点について述べる。

①この要綱は、ソ連軍を軽視した「一撃制伏主義」で、一撃すれば国境紛争は解決するとしている。当時の日本陸軍の兵站常識では、大兵団の陸路兵站線は200〜250キロが限度であるので、鉄道末端から750キロも離れたノモンハン地域まで到底大兵力は集中できないと判断していた。大八車による輸送と徒歩を前提にした日本の常識は、トラック輸送のソ連軍には通用しなかった。

②この要綱は、第3項に、敵が越境してきた場合これを殲滅するため「一時的にソ領に進入し又はソ兵を満領内に誘致・滞留せしむることを得」と規定し、また第4項に「国境明確ならざる地域に於いては防衛司令官に於いて自主的に国境線を認定して之を第一線に明示し」と規定していることなど、対外戦争に発展する危険を孕んだものであった。

殊に第4項の国境明確でない地域では、防衛司令官が自主的に国境線を認定して作戦するというのは、国境線を

現地の防衛司令官が自主的に決めるといふのであるから、国家としての国境線を決定するという外交権を侵害するものである。国境線を現地の防衛司令官が自主的に（勝手に）決めて、その線を越えて来るのは侵略として殲滅するといふのであるから、極めて危険であり横暴である。当時の陸軍はこれを正す冷静さに欠けていた。

③国境紛争中の6月、関東軍は国境を越えて、ハルハ河から約100キロ西のタムスクを爆撃した。関東軍は要綱に基づいて実施したのであり、これは「北辺ノ些事」であつて、軍司令官の権限であるといふほど強硬であつた、この件はタムスク攻撃の項で再述する。

四 第1次事件（5月11日～5月31日）

①外蒙軍の越境と搜索隊の出動

5月11日、外蒙軍若干が、ハルハ河を越えて侵入してきた。付近を警備していた満軍がこれを撃退したが、翌12日外蒙軍は兵力を増強して再侵入してきた。ハイラル（海拉尔）の第23師団長（小松原中将）は、搜索隊を基幹とする東支隊を派遣、支隊はこれを撃退し17日ハイラルに帰還した。

②山県支隊の出動

東支隊がハイラルに引き揚げると、ソ蒙軍はハルハ河右岸のノ口高地に侵

入し陣地を構築し始めた。小松原師団長は、要綱に基づき、越境したソ蒙軍を捕捉撃滅すべく、歩兵第64聯隊長山県大佐の指揮する山県支隊（歩兵第64聯隊第3大隊・搜索隊基幹）を出動させた。山県支隊は28日払暁を期して侵入したソ蒙軍を捕捉撃滅すべく行動を開始したが、前後左右に兵力が分離し、先頭の搜索隊は敵陣に孤立して全滅してしまつた。支隊は30日、部隊の増援を得て、搜索隊の死体を收容し撤退した。

以上、第23師団の一部による戦闘を第一次事件と称する。

五 ソ蒙軍の右岸橋頭堡陣地とタムスク集結の戦車・航空機撃滅計画

山県支隊が撤退すると、ソ蒙軍はハルハ河を越えて右岸地区に陣地構築を始めるとともに、左岸の台上殊にタムスク付近に航空機・戦車を集中させ始めていた。これに対し、関東軍は、23師団と第2飛行集団および第1戦車団を投入するいわゆる「牛刀主義」で、これだけの兵力を投入すれば、ソ蒙軍を撃滅できると判断し、タムスク空襲と両岸攻撃を計画した。関東軍は、タムスク攻撃を伏せて、23師団などの両岸攻撃計画を陸軍中央に報告した。中央部では、事態の拡大を恐れ、大して意味のない紛争に大兵力を使用するこ

とに反対の意見もあつた。また、一個師団が国境線を越えてソ蒙軍を攻撃するということは、戦争に発展しかねない大問題であつたが、板垣陸相の「一師団ぐらい、いちいちやかましく言わないで、現地に任せたらいいではないか」という一言で攻撃が決定された。

六 タムスク独断攻撃（6月27日早朝）

関東軍は、23師団などの両岸攻撃に先立ち、6月23日、タムスクなどへの越境攻撃を第2飛行集団長に命じた（関作命第1号）。タムスクなどは戦場と見なすべきで、これを攻撃するのは軍司令官の権限であり、大命に依る必要はない、また中央に洩れて中止せられる以前に実行すべきであるとして、27日タムスクなどへの攻撃を決定した。

返電した。このような関東軍の独善性を、陸軍中央部は統制し得なかつた。第2飛行集団は司偵隊も含め約120機をもつて、タムスクを急襲して100余機を撃破する戦果をあげた。引き続きサンベースを攻撃したが天候悪く、施設を爆撃して帰還した。

七 両岸攻撃（7月1日～7月5日）

タムスクなどへの航空攻撃の成果を利用して、23師団の左岸攻撃と安岡支隊による右岸攻撃が実施された。この両岸攻撃は、関東軍作戦課のいわゆる「牛刀主義」でソ蒙軍を一挙に包囲殲滅しようとしたものであつたが、ソ蒙軍を見くびり自信過剰になつていた関東軍の攻撃は成功しなかつた。

①安岡支隊の右岸攻撃（7月2日夕～夜、7月3日攻撃再行）

第1戦車団長安岡中将の指揮する安岡支隊（戦車第3・第4聯隊、歩兵第64聯隊など）は、充分な調整をすることなく攻撃を急ぎ、各部隊はそれぞれ分離した各個攻撃となり、結局右岸に侵入したソ蒙軍を撃退できなかつた。

②23師団の左岸攻撃（7月3日0230ハルハ河渡河開始、左岸で激戦5日撤還）

3日早朝歩兵第71・72聯隊はハルハ河を渡河し、続いて23師団に配属された歩兵第26聯隊も渡河して、左岸上の

ソ蒙軍を攻撃、機甲部隊を主とするソ連軍と激戦を展開し、戦闘の初期段階では、速射砲・肉迫攻撃などにより、ソ軍戦車などかなりの損害を与えたが、予想をはるかに上回る優勢なソ連機甲部隊の反撃を受け、攻撃を断念し撤退した。

八 歩兵の夜襲による右岸攻撃（7月7日～14日）

両岸攻撃に失敗した関東軍は、優勢な火力と機甲戦力および航空の影響をさけるため、歩兵4個聯隊などを投入して、右岸の侵入ソ蒙軍に夜襲を敢行したが、台上からの優勢な火力に阻止され、この攻撃も失敗した。

九 砲兵主体の攻撃（7月23日～25日）

左岸台上の砲兵を処理することなく、右岸侵入のソ蒙軍を撃滅すること困難であると判断した関東軍は、内地から野戦重砲兵を増強して一挙に左岸のソ軍砲兵を撲滅し、その成果を利用して右岸のソ蒙軍を一挙に撃滅する方針で、砲兵主体の攻撃を実施した。

しかし、火砲の門数・性能特に射程・弾薬量・観測点などで劣勢不利な戦いとなり、攻撃を中止した。

一〇 防勢への転移と持久戦

事件発生以来、右岸に侵入したソ蒙軍の撃滅のため、各種攻撃を繰り返してきた関東軍は、遂にこれを撃退できず、全般態勢上、防勢への転移という方針の大変換を迫られた。近代化されたソ連軍に対する認識の甘さと自己過信が、このような結果をもたらしたと言えよう。

23師団は、北はフイ高地から南は七四四高地までの約50キロという広正面を防禦することになった。防禦陣地を、左岸台上のソ連砲兵の射程外に、即ちノモンハン付近まで後退させることは、結果的にソ蒙軍の主張する国境線を認めることになり、事件発生以来払った大きな犠牲を無にすることになり、到底容認できなかった。

一一 ソ軍は大攻勢準備

この間、ソ連軍は大量の自動車を入れて、部隊・軍需品を輸送し、大攻勢の準備を進めていった。日本軍の兵站常識では予想もなかった大軍が送られていた。日本軍が、大攻勢を誤判断したのは、ソ連軍のインスピレーション情報によるところが大である。大軍であればあるほど、その行動を秘匿することは困難であるので、むしろある程度その行動の一部を匂わせ、適当に印象付けておき、実際に企図する行動の規模・内容は徹に秘匿し、最終的に意表を突くというものである。

防禦態勢に移ったことを示すため、陣地構築作業音を流し、防禦資材要求の電報を多数発し、また、両翼包囲するための大機甲部隊の移動は夜間に限定して、夜間爆撃・夜間射撃などで移動騒音を消すとともに、中央正面には機甲部隊が集結しているように、自動車の消音器を外して動かせるなど、さまざまな手段・方法を用いて日本軍を誤判断させた。

一二 ソ軍の8月攻勢

ソ軍は、前述したように大兵力の集中・弾薬等の大量集積を入念に実施して大攻勢の準備を着々と進め、8月20日朝、日本軍の不意をついて大攻勢を開始した。日本軍の約5倍の兵力を投入して、正面から強圧を加えつつ南北両翼から圧倒的優勢な機甲部隊を指向して両翼包囲攻撃を敢行した。

ジュエコフ大將の指揮するソ軍は、北集団・中央集団・南集団をもって、日本軍を両翼包囲し、日本軍の拠点式の守備陣地および砲兵陣地を分断破壊した。日本軍各部隊は、次々と重囲に陥り、壊滅的打撃を受け、ソ蒙側の主張する国境線以東に撃退された。

関東軍は、新編の第6軍（第7師団・23師団・第8国境守備隊など）をもって、23日攻勢に転移したが、火

力・起動力の劣勢と準備不足のため失敗に帰した。

一三 作戦の終結

関東軍の攻勢は失敗に終わり、殊に23師団は、第二次事件で70パーセントの損害を出し、最終的にノモンハン以東に撤退した。関東軍は、8月末7師団・2師団・4師団を集結して反撃しようとしたが、大本営は関東軍の攻勢を中止させて停戦交渉に入り、9月15日モスクワで停戦が決定された。その後国境画定交渉が行われ、国境線は、ノモンハン付近ではソ蒙側の主張していた線とし、ハタガヤ方面では日満側の主張した線として確定された。

ノモンハン事件における日本軍の損害は、「第二次ノモンハン事件部隊損害状況調査表」（第6軍軍医部調整部）によると、戦死7千696人、戦傷8千647人、生死不明1千21人、軍属死者41名、合計1万7千405人であった。なかでも第23師団の損害は1万696人で全体の61パーセントを占め、師団の総出動人員1万5千400人の70パーセントという壊滅的な損害であった。

ソ蒙軍の損害は、ワルターノフ大佐の「捕虜と損失の諸問題」によると、戦死3千42人、戦傷1万5千699人、合計1万9千121人で、日本軍よりも多く

の損害をだしていることが判明した。最近では、ソ蒙軍の損害は2万数千人という説もある。しかし、この損害者数をもつて、日本軍は敗北していないと強弁するのは、前述したように、木を見て森を見ない論である。

一四 教訓

作戦終結後、陸軍はノモンハン事件研究委員会を設置して、国軍の戦力・戦備万般にわたる改善の資料を得ることを目的に、戦略・戦術と兵備全般を担当する第一委員会、情報を担当する第二委員会、航空を担当する航空研究調査中央委員会を設けた。これらの委員会の中心をなすのは第一委員会であつた。第一委員会の委員長には、大本営陸軍部研究班長の小池龍二大佐が任命され、戦略・戦術部門は陸大教官の小沼正治中佐が担当した。

戦略・戦術部門の総判決は、「国軍伝統の精神威力をますます拡充するとともに、低水準にあるわが火力戦能力を速やかに向上せしむるを要する」というもので、国軍として改善すべき点も多々挙げられていた。第一委員会の報告は、同年12月18日に参謀総長に、翌日参謀本部員、翌々日陸軍省員に対して実施され、翌年1月報告書を提出したが、参謀本部長・陸軍大臣・教育總監の三長官が門外不出として保管し

た。ノモンハン事件の教訓は、三長官の金庫に入れられ、全軍には伝えられず、事件の教訓は生かされなかつた。

おわりに

日本軍は、国境をめぐる紛争に大兵力を投入し、大きな犠牲を払つたが、侵入したソ蒙軍を撃退できず、日本側の主張するノモンハン付近の国境線も維持できず目的は達成できなかつた。一方、ソ蒙側は、自分らの主張する国境線を確保し、東部国境を安泰化することができ、特にソ連は、ヨーロッパにおけるドイツとの戦いに際し、日本軍の脅威を減殺したことは、戦略的な勝利であつた。

日本軍はノモンハン事件の作戦指導にあたり、陸軍中央と関東軍の思想が一致せず、一貫した作戦指導が実施されなかつた。中央部も関東軍も、上級者の大局観とそれに基づく勇断が足りず、戦術的にも戦略的にも敗北を喫した。第一線の将兵は、優勢な敵を相手に勇戦、敢闘したが、いかんともできなかった。また、関東軍作戦参謀の独断およびそれを許した軍司令官・参謀長に対しても厳正な処置がなされなかつた。

日本軍の上級者特に情報・作戦参謀の、冷静客観的な敵情分析が充分でなかつた。自己の先入観に囚われて自己

過信に陥り、不利な情報をも冷静に分析するだけの度量と勇氣に欠けていた。事件後のノモンハン事件研究委員会においても、上級指揮官・幕僚の作戦指導の不適切、情報分析の誤り等を指摘することはなかつた。ノモンハン事件では、圧倒的優勢な近代軍に敗れたというが、何もこのような有形的な戦力だけに敗れたのではなく、上級指揮官・幕僚などの資質・能力・勇氣・責任感など、無形的戦力においても敗れたとも言える。

《参考文献》

・戦史叢書『関東軍ハ1V対ソ戦備・

ノモンハン事件』朝雲新聞社、1969年

・関東軍参謀部第一課「ノモンハン事件機密作戦日誌」(現代史資料『日中戦争(二)』みすず書房、1964年)

・小松原道太郎「小松原師団長ノモンハン陣中日誌」(『増刊歴史と人物』秘史太平洋戦争』中央公論社、1984年12月)

・読売新聞社編『昭和史の天皇』25、「同」26(読売新聞社、1974年)

・ノモンハン・ハルハ河戦争国際学術シンポジウム実行委員会編『ノモンハンハルハ河戦争』原書房、1992年

・小池龍二「小池龍二回想録」